人物の気持ちの移り変わりを読もう「ごんぎつね」
～ごんぎつねフェアーを開こう

三原市立三原小学校　福原喜美子

1　実践の趣旨

本学級の児童は，物語作品を読んだり書いたりすることが好きな児童が非常に多い。朝の読書の時間や給食待ち時間の読書の時間に読み応えのある物語を読んでいる子が半数ぐらいいる。反面，物語作品の世界観をとらえきることが難しく，図鑑や絵本等しか読んでいない児童も数名いるという実態である。

そこで，本単元では，「ごんぎつね物語」を書くという活動を設定し，叙述に立ち止まり，登場人物の気持ちや気持ちの変化を読み取りながら，登場人物の相互関係や物語の展開等に着目して読む力，自分の考えをもちながら読む力を身に付けさせたいと願って実践を試みた。

2　実践の概要

（1）単元名　人物の気持ちの移り変わりを読もう「ごんぎつね」（東京書籍　４年　下）

～　ごんぎつねフェアーを開こう（ごんぎつね物語を書こう）　～

（2）　つけたい力

○　人物の気持ちの移り変わりを描いた物語を読んで関心をもち，自分の考えをもって読もうとしている。

〔国語への関心・意欲・態度〕

○　叙述に即して，場面の移り変わりや人物の気持ちの変化を読み取ることができる。

〔学習指導要領の内容項目Ｃ読　ウ〕

○　読み取った内容について自分の考えをまとめ，感じたことや考えたことを伝え合い，一人一人の感じ方にちがいがあることに気付くことができる。

〔学習指導要領の内容項目Ｃ読　エ〕

（3）教材について

本教材は，ごんという名前のひとりぼっちの小ぎつねと兵十という二人の人物の間で起こった出来事を通して，心の交流の難しさ，心を通わせようと努力しても通わせきれない切なさを描いた物語である。

一人ぼっちでいたずらばかりしていたごんは，自分のいたずらに対する償いの気持ちで，同じような孤独な立場になった兵十への共感から，兵十との心の交流を求めていく。しかし，そのごんの善意の行為は，かえって兵十を傷つけたり，理解されなかったりする。ごんは，何度もひたむきに兵十に償いをし，自分への関心を求めるのだが報いられない。そうした気持ちを兵十が知るのは，ごんの死に際してであった。死によってしか心が通じ合わなかった二人の悲劇は，心のふれあいが難しくなり，人と関わる力，交わる力が衰退しつある現状においては，子どもを取り巻く人間社会においても現代社会の悲劇性の象徴的な意味を持つであろう。

（4）指導観

指導に当たっては，死の間際に初めて本当の心が伝わったことを読み取らせるために，「ごんぎつね物語」を書くという活動目標に向かってごんや兵十の気持ちや気持ちの変化を読み深めさせ，ごんと兵十の心の

距離の変化を読み取らせていきたい。その際，情景描写と心理描写を結びつけて読み取らせ，登場人物の気持ちや場面を想像して読み取らせていくようにした。

まず，物語を読み，学習課題を設定し読み進めていく。そこで，「おれと同じ，一人ぼっちの兵十が。」という親近感をもち，自分のいたずらを悔い償いをしようとするごんの気持ちや，引き合わないと思いながらも償いを繰り返すごんの気持ち，最後にうなずくごんの気持ちや，その償いの気持ちに気付かずごんを撃った兵十の気持ちを考える。また，物語の展開や悲劇的な結末についても考えさせていった。

「ごんぎつね物語」を書くにあたっては，強く心に残ったことを感想に書き，それをもとに「ごんぎつね物語」の構想をまとめさせた。続き話に強く心に残ったことが表現されるよう留意しながら，原稿用紙２枚程度に書かせていった。また，この「ごんぎつね物語」は，「ごんぎつねフェアーを開こう」という共通の活動の場である，他のクラスとの交流学習において，相互評価を行い，学習の成果を確かめ合いながら進めていくった。

（5）単元の目標

○　場面の移り変わりや人物の気持ちの変化を読み取り，「ごんぎつねフェアー」を開くことを通して，感じたことや考えたことを伝え合い，一人一人の感じ方にちがいがあることに気付くことができる。

○　物語を読んで，強く心に残っていることを中心に，「ごんぎつね物語」を書くことができる。

（6）指導の工夫

「対話」「体験」を取り入れた指導を工夫していった。

○　対話の場

自己内対話

主な登場人物の人物像や・物語の設定（場所・事件の起こり等）について叙述をもとに読み取る。

各場面の，ごんの気持ちや様子の変化を読み取り，物語の構成・展開について考える。

ごんや兵十の行動や会話，様子などに着目し，場面の様子やごんや兵十の気持ちの変化，二人の関係の変化を読み取り，「ごんぎつね物語」を書く。

児童間対話

登場人物の気持ちを表している文を出し合う中で，登場人物の気持ちの変容や言動の意味について話し合い，読みの深まりを図る。

人物の気持ちの移り変わりについて感じたこと考えたことを話し合い，物語の展開や登場人物の関係等について考える。

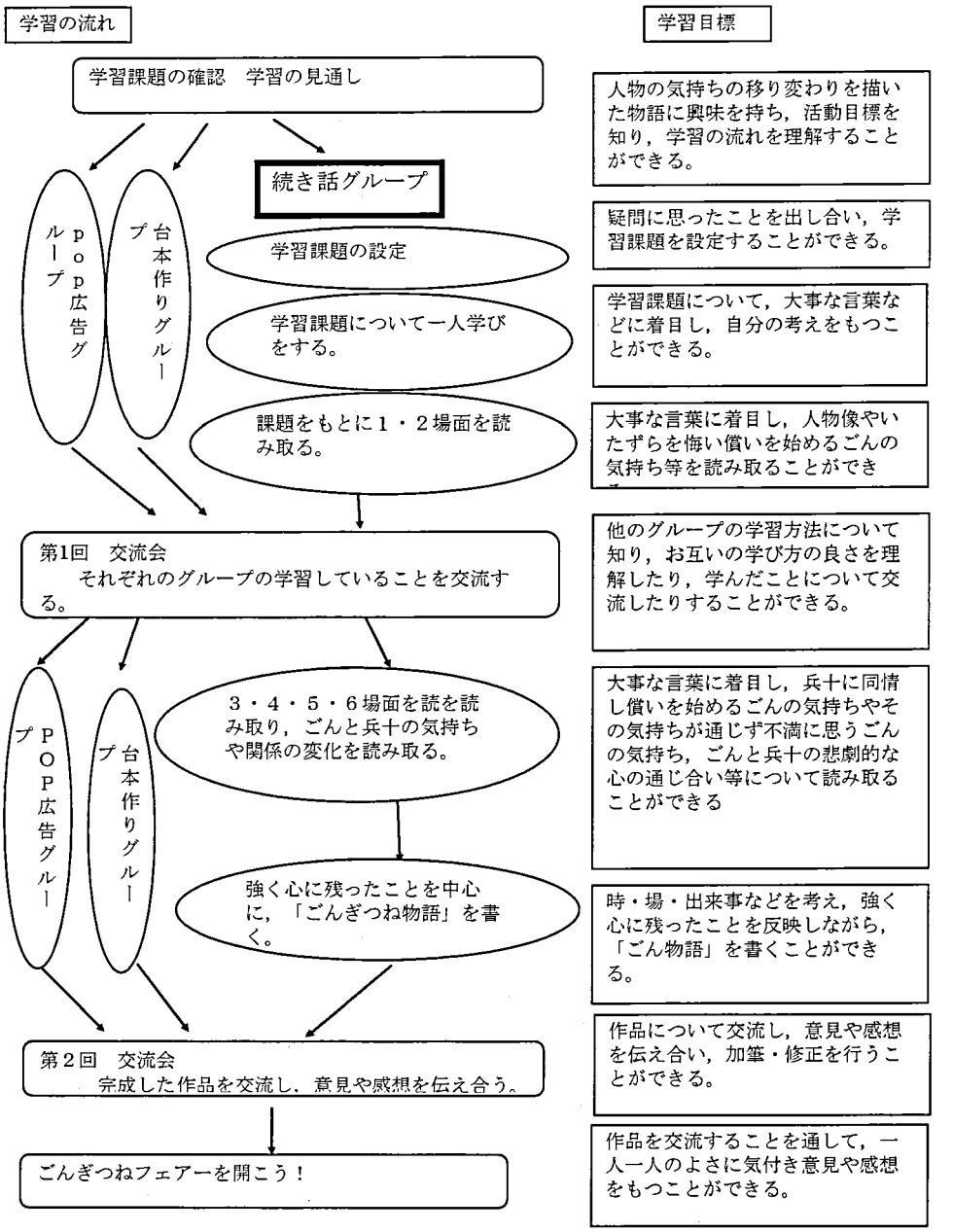
○　体験への手立て

ごんや兵十の気持ちを読み深め，ごんの言動について考えたり二人の関係などについて考えたりして対象化を図る。

登場人物の気持ちや様子を表している文や心に響いた文等に着目し，物語の展開や結末について考え，「ごんぎつね物語」を書くことにより，対象化・典型化を図る

（7）単元の流れ

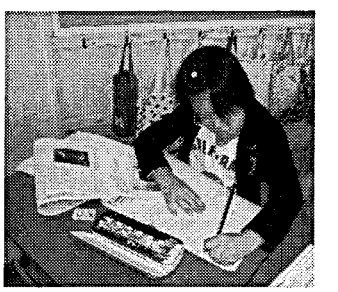
４年生３クラスで交流できるよう，言語活動を３つ選び単元を設定したうちの「続き話グループ」である。



（8）学習の様子

①　学習課題を設定し，学習の見通しをもつ。

活動目標を知らせ意欲付けした後，題や冒頭部分を読み，物語を読もうとする意欲をもたせ，全文を音読した。その後，疑問に思ったこと・もっと知りたいことなどについて考えさせ，学習課題を設定した。



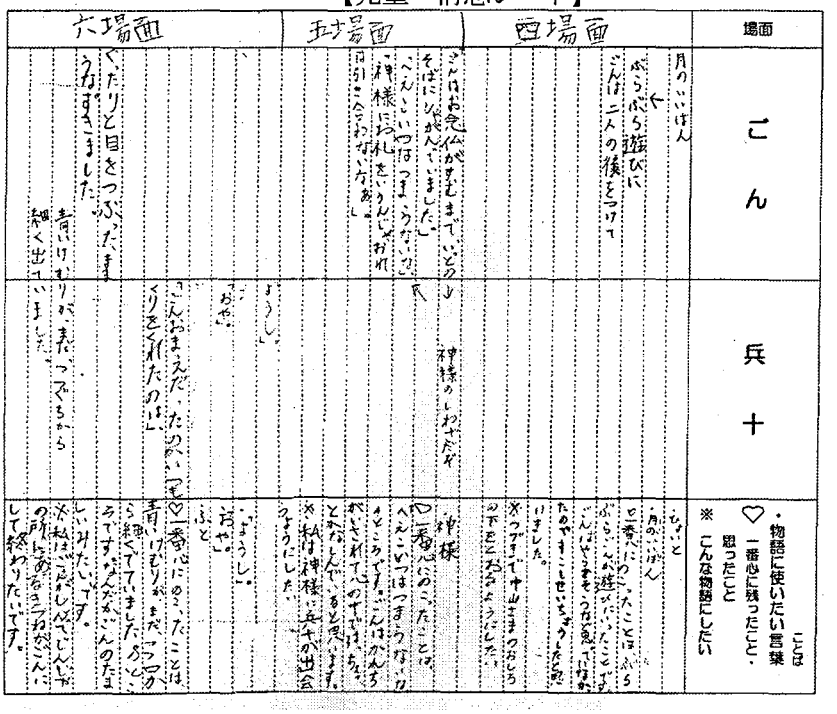
②　「ごんぎつね物語」構想をもつための読み取り学習

まず，学習課題をもとに，自己内対話を行い，本文から分かったこと・考えたこと・疑問に思ったことなどを自由に書きこんでいった。

次に，場面ごとの読み取りを行った。学習課題に沿って，分かったこと・考えたこと・疑問に思ったことなどを出し合い，交流し合った。

場面ごとに課題追求した後，その場面のごんや兵十の気持ちの移り変わりが分かる大事な文・言葉，特徴的な言葉などを書き抜き，構想シートにまとめた。そして，その場面を学習したことを生かした構想を考え，構想シートに書いていった。

【児童　構想シート】



ごんぎつね（こうそうシート）

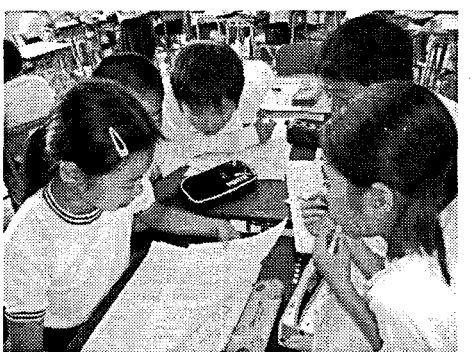
☆ 続き物語を書くために、ごんや兵十の気持ちの移り変わりが分かる大事な言葉や、とくちょう的な言葉を書こう。

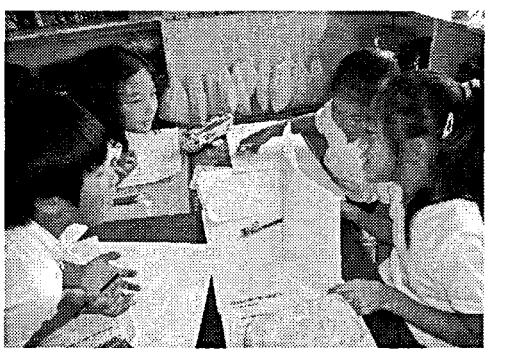
【授業風景】

③　交流会

交流は２回行った。第１回の交流会は，自分たちの組で行う学習方法について説明し，１場面を学んで分かったことや思ったことなどを交流していった。交流後の感想では，一部のグループでは，初めて話すのでなかなかうまく話し合いが進まなかったところもあったが，他の組の学習内容を知り，次の交流を楽しみにしているという児童が多かった。

第２回目の交流は，お互いの作品を紹介し合い，思ったことや・考えたことなどを伝え合った。どのグループも，興味深そうに作品を紹介し合っていた。学習後の感想では，「たくさん感想を言ってもらってがんばって書いたかいがあった。」「違う方法で勉強したけど，考えていることは同じだと思った。」「みんなよく考えていると思う。」などすべての児童が肯定的な感想をもつことができた。





【　第２回交流会で自分の書いた「ごんぎつね物語」を紹介している様子　】

④　各場面ごとに考えた構想をもとに「ごんぎつね物語」を書く。

場面ごとに描いた構想を整理し，「ごんぎつね物語」の下書きを書いた。その後，加筆修正を行い清書を書き進めた。清書には，文章に合う挿絵も描いた。用紙は，3 パターン用意し，挿絵と文章のバランスも工夫できるようにした。

【児童作品「ごんぎつね物語」】

ぽつりぽつりとあめがふってきた。ごんはぴくりとも動かなくなった。外の雨ははげしくなった。

「ごめんよ、ごん。また、いたずらをすると思っていたんだ。本当にすまなかった。」

と泣きながらあやまった。兵十の顔は、雨となみだでぬれていた。

　しばらくたったある日のこと、兵十と加助は二人でごんの葬式をしていた。

「なあ、加助。」

「ああん？」

「お前は栗や松たけをくれたのは、神様だって言っただろ。でも――。あれはごんだったんだ。」

「そうだったのか。おれはてっきり神様と思いこ込んでいたんだ。しかし、なんでお前に栗や松たけなんかをくれたんだろう。ふしぎだなあ。」

「ごんは本当はやさしいやつだったんだ。きっと、うなぎをぬすんだつぐないに、もって来てくれたんだろう。」

それっきり、二人はだまって兵十の家のうら庭に、ごんをうめた。

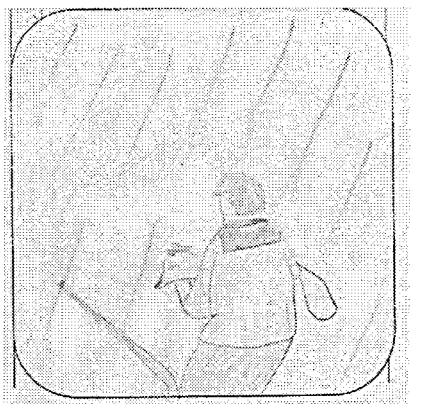
兵十は思った。

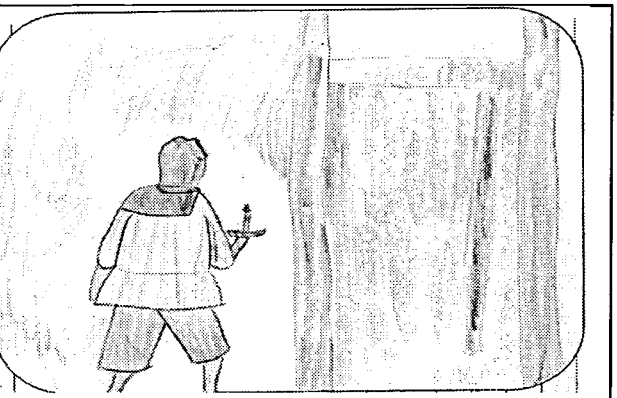
「いつか，石をほってたててやるから、せめてこれでがまんしてくれ。」

兵十は、そばにあった木のぼうをそっとたてた。

ある満月の夜のこと、きれいにすきとおったごんは、ぶらぶらあそびにでかけた。

「ここは、どこだろう。」





しばらくたつと、ごんは、兵十の家のうら庭にいることに気付いた。

「兵十に気持ちを伝えられてよかったなあ。」

そう思いながらごんはさまよっていた。と、

「ものおきから明かりがもれているぞ。」

ごんは家の中に入っていった。その時、兵十が一人言を言った。

「今頃、ごんはどうしているだろう。」

兵十は石を手にして何かやっていた。ろうそくの明かりが兵十をなぐさめるように温かく辺りをてらしていた。

その時、兵十はふと顔をあげた。ろうそくの光がゆらりとゆれた。兵十が辺りを見回すと、うらの庭の方からきれいにすき通った黄色いものが見えた。

ふしぎに思った兵十は、ろうそくをもって庭に出た。すると、ごんのおはかの木のぼうが横だおしになっていた。兵十は、

「今のは……お前だったのか？明日にはきっと小さいけれど、りっぱな石をおいてやるからな。」

とごんの小さなおはかに話しかけた。

次の日は少しくもっていた。こごえるように寒い風が通り過ぎていく。兵十はごんのおはかの前まで来て、

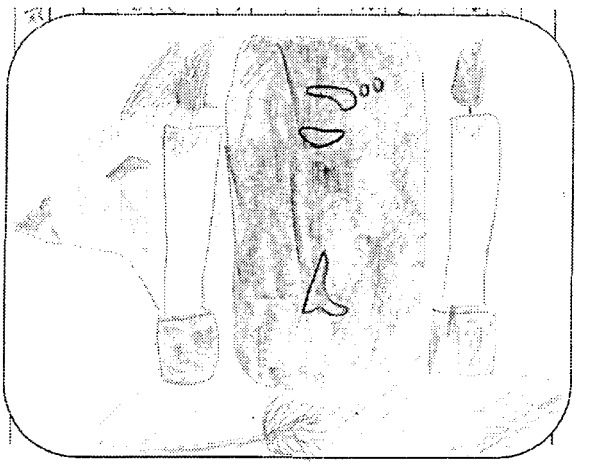
「もう、冬になるなあ。」

そういって木の棒を捨て、ごんと書いてある、小さくて形のよい石をおはかの上にのせた。その時、おはかの辺りにうっすらと光が注がれた。まるで、ごんがほほえんでいるかのように。兵十は庭のすみにさいていた、小さなひがん花を手にとってごんのおはかの上にそなえておいた。

約一年後、温かな春だった。兵十はあれから、一生懸命はたらいた。そして、うらの庭には、ごんと兵十のどうぞうがたっていた。その中には、ごんがねむっている。そばには、大きなさくらの木がどうどうとたっていた。

その夜、兵十は自分の体が軽くなったことに気付いた。春の夜のはだ寒さも感じない。

その時、黄色くすき通ったごんが、兵十を見上げていた。きれいにすき通った二人は、目になみだをうかべながら、踊った。さくらのまう、まだはだ寒いの夜に、二人はくるくる回りながら天にのぼっていった。そして、二人仲良くやすらかなねむりについた。



次の日、加助が兵十の家をたずねると、兵十は家の中に横たわっていた。

「おうい、兵十、どうしたんだ。ねつか。」

ひたいをさわると、氷のようにつめたかった。その時、ごんと兵十のどうぞうがほほえんだように見えた。そして、はれた空から光がふってきた。

「とうとう、いっちまったんだな。」

加助の目から、小さなしずくがぽろりと流れ落ちた。

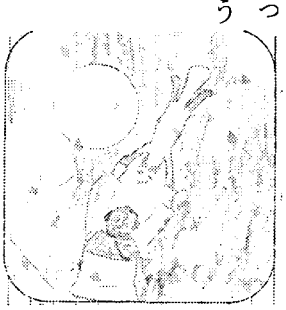
その日の昼、兵十のそう式が行われた。そして、おこつをごんと同じおはかへ入れた。さくらの木の下で、ごんと兵十はまだ踊り回っていた。

兵十の家はもう今はない。けれども、あと地にお寺が建った。今でも、お寺のすみの方に、少しかけているどうぞうが残っている。うらには、大木となったさくらがきれいにさきほこる。

そして、兵十とごんは春のきれいな満月の夜に、天からおりてきて、さくらの木の下でおどっているという。

ほら、今日も満月だよ。

空を見上げてごらん。きっと、兵十とごんが楽しそうに踊っているよ。



⑤ 成果と課題

○ 「ごんぎつね物語」を書く活動を設定したことにより，児童が物語に出てくる言葉や場面・情景・登場人物の気持ちや特徴・関係などに着目しながら読み取り，自分なりの工夫をし，意欲的に続き話を書くことができた。

○ 課題をもとに，ごんや兵十の気持ちの変化・二人の関係等を交流した後，各自構想をまとめていくようにしたので，学習が進むごとに児童の意欲が高まり，気持ちの変化や二人の関係等を豊かに読み取ることができた。

○ 自分の考えをもたせ交流を行ったため，文中の叙述等を根拠に自分の考えを発言することができた。

● 文章を書く力に差があったため，構想から作品を書くところに指導の工夫が必要であった。

● 友達の発言を受け，自分の考えとの相違を明確にしながら発言していく力はまだ不十分である。